博士学位論文審査要旨

氏　　名	根　敦　　阿　斯　尔
学 位 の 種 類	博士（歴史民俗資料学）
学 位 記 番 号	博甲第 268 号
学位授与の日付	2020 年 9 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文の題目	チベット仏教寺院の伝統と革新 ―内モンゴルフフホト市域の事例を中心に―
論 文 審 査 委 員	主査　　神奈川大学　　教授　佐　野　賢　治
	副査　　神奈川大学　　教授　小　熊　　誠
	副査　　神奈川大学　　教授　周　　星
	副査　国立民族学博物館　名誉教授　立　川　武　蔵

【論文内容の要旨】

本論文は、中国、内モンゴル自治区モンゴル族社会におけるチベット仏教受容を、寺院の有り方から僧侶の日常生活まで、仏教サイドの連続性と非連続性との関係、換言すれば伝統と革新性に注目し、そこからチベット仏教が固有信仰を有するモンゴル族社会にどのように布教、受容されていくのかの過程を明らかにする。現代中国においてチベット仏教は人類の精神文化、および伝統的文化の中で最も保守的なものとしてさまざまな規制下にあり、加えて、都市化など急速な経済的発展に伴う物質文明の波及はチベット仏教寺院にも大きな変革を促している。寺院の観光化は不可避となり、また僧侶の生活の自立も急務となっている。モンゴル族の宗教世界の中核を担ってきたチベット仏教の寺院、僧侶の有り方は、この地区のモンゴル族の信仰生活にも反映、多大な影響を及ぼす。寺院、僧侶により保持されてきた仏教文化の伝統、その変化に焦点を当て、今日の中国モンゴル民族のチベット仏教に対する信仰を仏教民俗学的立場から検討する。

本論文は、序論と終章を含め以下の 8 章から構成される。

序論　課題と方法

第 1 節　研究の動機と目的　1 研究の動機　2 仏教民俗学の立場　3 研究の目的　第 2 節　先行研究と問題所在　1 チベット仏教研究史の検討　　ⅰ欧米における研究　ⅱ日本における研究　ⅲ中国における研究　2 先行研究　ⅰ寺院に関する研究　ⅱオボー儀礼に関する研究　ⅲチャムに関する研究　ⅳバリン儀礼に関する研究　3 問題の所在　第 3 節　研究対象と研究方法　1 研究対象　2 調査地理的範疇　3 研究方法　4 論文構成の概要

第 1 章　内モンゴルにおけるチベット仏教の歴史的展開

はじめに　第 1 節　内モンゴルにおけるチベット仏教の歴史的展開　1 モンゴル族の早期仏教受容　2 明朝末期におけるモンゴルへの再伝来　3 明・清時代的転換期の仏教信仰―イック・ジョー寺の例から　4『綏遠通誌』から見るフフホト市域の仏教民俗　ⅰモンゴル人の娯楽と法事活動　ⅱモンゴル人の婚姻儀礼と仏教信仰　ⅲモンゴル人の葬式と仏教信仰　第 2 節　文字史料から見る伝統的な出家習俗　第 3 節　公文書史料から見る五当召の事例　小結

第 2 章　調査対象地とチベット仏教寺院
はじめに　第 1 節　フフホトの市域の概要　1 フフホトの自然環境　2 フフホト市域の人口と宗教的概況　ⅰ人口　ⅱ宗教の現状　3 商業定住都市の成立　4 フフホト市域の漢化と商業　ⅰ『綏遠通誌稿』からみる内モンゴルの漢化　ⅱ内モンゴルの伝統的な商業の現象　第 2 節　チベット仏教寺院の興隆と衰微　1 フフホト市域における寺院の概観　2 寺院の伝統的な興隆と衰退―シレート・ジョー寺を中心に　ⅰ寺院と活仏の由縁　ⅱ寺院の興隆　ⅲ寺院の衰退　第 3 節　チベット仏教寺院の復興と傾向―イック・ジョー寺を中心に　1 文献資料からみる 1930 年代の寺院の現状　2 現代チベッ仏教寺院の復興　3 大雄宝殿とその経堂法座　小結

第 3 章　内モンゴルにおける僧侶の現状
はじめに　第 1 節　チベット仏教における基本的教義と「法」の解説　1 基本的教義　2 仏教における「法」の理解　第 2 節　現代における出家の形態　1 ラマの語義　2 僧侶のオーラル・ヒストリーから見る出家の目的　3 寺院継承の現状　第 3 節　寺院の食文化の変容　1 寺院の奶茶　2 寺院の伝統的な飲食形態　3 寺院の食器類から見る習俗　4 寺院における茶俗　5 食文化の現状　ⅰ茶について　ⅱマニ法会での食文化　6 食文化の変容　小結

第 4 章　僧侶養成と念仏の革新
はじめに　第 1 節　寺院伝統習俗の革新　1 中華人民共和国建国直前の状況　2 内モンゴル自治区成立以降の改革　第 2 節　僧侶養成の現状　1 現代寺院管理システムの確立　2 寺院管理の現状―イック・ジョー寺の事例　第 3 節　僧侶の日常念仏　1 六字真言の概念　2 物語から見る六字真言の由来　3 観音菩薩信仰との信仰　第 4 節　マニ法会の現状――イック・ジョー寺の事例　1 中華人民共和国成立直前の状況　2 マニ法会の事柄　3 マニ法会の行事　4 マニ法会の現実的な意義　小結

第 5 章　バリン儀礼をめぐるモンゴル仏教の特徴
はじめに　第 1 節　チベット仏教のバリンとは何か　1 地域的なバリンの語義　2 バリンの由緒　第 2 節　各地域の差異　1 バリンの形態と種類　ⅰ形態　ⅱ種類　2 地域的比較と解読――チェージャル・バリン儀礼の例　3 各地域の比較分析　4 イック・ジョー寺のバリンの製作の事例　第 3 節　バリンの製作素材と民俗　1 チベット人的な眼中の宝――ハダカムギ　2 莜面(ユウメン)　3 木の材質への変容要素　4 神秘的な内在の事柄　ⅰ内在的な素材　ⅱ禁忌について　第 4 節　バリン儀礼の意義と役割　1 民俗から見た意義　2 儀軌経から見た意義と役割　小結

第 6 章　チャムをめぐる仏教と民俗
はじめに　第 1 節　チベット仏教におけるチャムの起源
1 チャムの歴史と種類の展開　ⅰ語義　ⅱ諸物語から見るチャムと民間信仰の関連性　ⅲ種類　第 2 節　イック・ジョー寺の祈願大法会の実践現状　1 祈願大法会の由縁　2 祈願大法会の行事活動　ⅰ正月行事　ⅱ六月行事　3 祈願大法会の事柄　ⅰ供物の事項　ⅱジュラの供養現状　4 祈願大法会のチャム　ⅰチャムの場所　ⅱチャムの楽器と配置　ⅲチャムで使用される楽器の形態　第 3 節　チャムの変容――イック・ジョー寺の例　1　1980 年～1999 年までの踊り演目の状況　2 チャムの演目の内容と象徴する意味　3 バック・トダカムの踊りの事例　第 4 節　チャムの役割と変容　1 バック・トダカムの踊りから見た役割　2 チャガ・ウブゲンから見た仏教と民俗の現象　3 チャムの革新の要素――イック・ジョー寺の例から　小結

終章―総括と展望

第１節　本論の総括　第２節　チベット仏教伝承の性格の解析　第３節　現代チベット仏教寺院伝統と革新の解析　第４節　現代社会における仏教文化の消失と現代への適応　第５節　今後の課題

巻末には、謝辞とともに参考文献（日本語・中国語・英語・チベット語）、ウェブサイト、新聞を付す。

各章の大要を示すと、序論では、研究の動機と目的、先行研究、問題の所在、調査地の地理的範疇を述べる。

第１章では、チベット仏教の基本的性格について概論、チベット仏教が、内モンゴル地区のモンゴル族に歴史的にどのように受容されたかを国レベル、民族・民俗レベルで示される。元朝、明・清朝期の受容の差異からはじめ、チベット仏教が民衆の間に広く受け入れられた清朝期から中華民国期、中華人民共和国成立以前を一期と考え、伝統的チベット仏教と民俗の関係が文字史料から検討される。社会主義中国の成立以後の革新的チベット仏教との比較対象の指標となり、一家から男子を必ずラマ僧として出家させる規定など、モンゴル族社会との密接な関係が多角的に論じられる。

第２章では、調査対象地として、近年、急速な経済発展を遂げている内モンゴル自治区の首都フフホト市域に所在するチベット寺院の概況をまとめる。中国国内において、チベット仏教の伝統文化は文化大革命（1966～76）より破壊された後、1980 年以降、公式に復活が認められ復興の途次についた。著者自身が僧侶として在籍したイック・ジョー（大召）寺を中心に、この間のチベット寺院の盛衰と復興プロセスの実態、および現在の寺院の変化をそれぞれの寺院の事例から述べる。あわせて、内モンゴルの近代化、モンゴル族の漢化について『綏遠通誌稿』を素材に論じ、チベット仏教寺院を取り巻く文化環境の変化を示す。

第３章では、チベット仏教寺院における僧侶の公と私の生活、その変化について述べる。チベット仏教僧侶の生活の中心は、ラマ・師僧から経典教義、儀礼作法を学び、「法」を理解することである。そのために経典、辞書などの文献資料や研究書の整理に従事する。一方、日常生活の維持、衣食住に関わる作務が若手の僧には課せられる。寺院の伝統的な飲食の有り方を奶茶作法の事例から紹介、また内モンゴルのチベット仏教寺院の食文化が示す伝統と変容について全般的に検討する。マニ法会など祭事には供物としての飲食物の作成もあり、僧侶は寺院において、聖と俗の両面にわたる活動にかかわる。その間、日常的に何かにつけ唱えられる「六字真言」についても触れる。僧侶の個別的オーラル・ヒストリーも取り上げ、フフホト市域における僧侶の出家の目的と寺院の継承に関わる現状を分析、出家僧と在家僧の違い、出家の形態と信仰意識の強弱などについて論じる。

第４章では、イック・ジョー寺の事例を中心に、観音菩薩信仰の色彩をもつマニ法会を取り上げ、マニ法会をめぐる世俗化や信仰形態の変化に注目し、このマニ法会の執行に集約的に表れた仏教民俗の変化と寺院の管理システム、役僧の継承の問題などについても言及する。その上で、現在の内モンゴル地域において行われているマニ法会の性格と参加する信者の特徴を指摘する。

第５章では、チベット仏教寺院の最大の祈願大法会で行われるバリン儀礼をまとめる。バリン儀礼は、供物の主素材となるハダカ麦の種類や地域のそれぞれの信仰民俗を反映し、多様な要素が付加されていった。イック・ジョー寺のバリンと他地域のチェージャル・バリンを比較し、バリンの形態の変化を明らかにする。さらに、フフホト市域におけるチベット仏教寺院の伝統的な供物儀礼の性格、役割、意義などについても述べ、その変化の位相を示し、さらに、バリン儀礼からみた仏教と民俗の関係を糸口に伝統文化に与えた仏教の影響を論じる。

第６章では、フフホト市域のチベット仏教寺院、イック・ジョー寺のチャム踊りに焦点を当て、チャム踊りに表出した仏教と民俗の関係について論じる。この踊りは他の寺院の踊りの影響を受けて作られたチャム踊りであるが、寺院に元から伝わる伝統チャム踊りとされ、継承されてきた。かつて本寺の僧であった著者は自らの体験を交えて、寺院サイドのから見聞した踊りの準備、作法から、復興の過程、祭り自体の意味付け・目的と社会的役割の解説と参会者の意識、解釈を合わせて

儀礼を総合的にとらえる。特に近年の、チャム観光化した寺院僧侶の踊りに対する目的観と観光客の感想のずれの意味などを検討する。

終章では、チベット仏教伝承の性格、現代チベット仏教寺院における伝統と革新、および宗教伝統文化の消失と現代への適応、三点の考えをまとめた。内モンゴルフフホト市域のチベット仏教寺院の事例から、現在までの仏教伝承の性格と寺院運営、寺院復興の過程と現実態、および僧侶の修行、日常生活における変化の現状を述べた上で、観光化に焦点を当ててチベット仏教の持続と革新の課題を整理した。最後に、現代社会における伝統文化の消失に対する対策、現代化への適応策への考えを述べた。

【論文審査の結果の要旨】

本論文の最も評価すべき点、または特異な点は、著者が少年時代より 11 年間在籍したフフホト市のイック・ジョー（大召）寺における僧侶体験を踏まえての立論であり、また、還俗後においてもチベット仏教文化に対する持続的な敬意と、社会主義中国における宗教政策下でその伝統の保持と発展を願う心意が執筆の大きな動機となっていることである。モンゴル民族を出自とし、新中国成立後生まれの著者が僧院に入門、仏教教理、儀礼の学習から炊事など日常的作務まで、僧院生活を内部的に体験し、その一方、師匠、先輩僧侶から文化大革命中の僧院内外の出来事を直接聞くなど、まさに激動期のチベット僧院の伝統と革新を記述者として最適任と認められるからである。

そこで、著者はこの変革期の記録を仏教者としての視角、心情にとらわれることなく、信仰として受容している民俗サイドと合わせて考察する仏教民俗学的立場から記述、分析する方法を志向し、さまざまな制約のある本国から離れ日本に留学、民俗学的手法を学び、本論としてまとめ上げた。サンスクリット語はじめ、チベット語、モンゴル語、中国語、日本語にわたる多言語の経典、文献を渉猟して教理の内容、儀礼の時代的変遷を明らかにすると共に、チャム、バリン、オボー儀礼など各寺院、地域での詳細な現地調査、動態的報告も許された範囲での優れた分析とともに提示されている。著者の長年にわたる人間関係がなければ、見ること、聞くことができない儀礼や作事があり、また著者の解説がなければ理解が行き届かない事例も多々示され、仏教民俗学的立場の有効性が十分に発揮され、余人には執筆が叶わない論文構成、内容となっている。

著者は、いわば仏教と民俗の間の仲介・介在者となるが、一方、この立場はそれぞれの立場の主意、主張を後退させる。仏教は仏教経典にその原一性を求めるが、サンスクリット語からチベット語、モンゴル語訳における意味づけ、その性格をどう捉えるのか、供物であるバリンとドルマの微妙な翻訳の差をどう考えるのか、また、著者が論文中で多用する「儀軌経」の実態は何かなどの説明が仏教学から見ると不足となる。一方、民俗学的視点から見ると、須弥山の象徴ともされるバリンとモンゴル族のハンオラ、山岳信仰への関係の有無、供物の形態や色のそれぞれの意味の背景の説明などが欲しいところであった。オボー祭祀にしても、牧畜から農耕民化への過程で、テングリ（天）から土地神祭祀に移行し、関係する宗教者がシャーマンからラマ僧に変遷する位相などを、寺院の境内地で行われるオボー祭祀などの分析から具体的に論じてほしかった。いずれにせよ、民俗的儀礼が仏教的儀式に変っていく変遷を著者は本論で示唆しており、今後の体系化が期待される。本論では、著者の仏教民俗学的立場が十分に提示されているとは言えないが、仏教の民俗化、民俗の仏教化を仏教民俗成立の方向性として論じた藤井正雄の指摘、また、仏教寺院の経済的基盤の有り方からその時代的性格を論じた五来重の論など日本の仏教民俗学の先行研究などを参照しての研究の総括が待たれる。

自然信仰、シャーマニズムを民俗信仰の核としてきたモンゴル族が、成立宗教であるチベット仏教をなぜ選好したのかは、日本における仏教民俗、神仏習合史を考える上でも大きな示唆を与えてくれる。本論文は換言すれば、チベット仏教と民俗信仰との習合により「モンゴル仏教」が新たに

成立、その性格を論じたことになるからである。普遍的な仏教教理に対し、少なくとも大乗仏教圏におけるチベット仏教、中国仏教、朝鮮仏教、日本仏教の異同は、仏教を指標にしての比較民俗論ともなり、それぞれの民族性・民俗性（ここでは一民族内における地域性）を明らかにする視角を提示した論考としても高く評価されことになる。

本論文は先行研究の学説整理と検討を綿密にした上で研究課題を設定し、関係する経典、地方志、民俗方面の文字記録を博捜、精読し、また幾多の制約がある中、現地調査による儀礼の参観、関係者からの聞き書きなどの諸資料との総合化を試み、その分析と考察が的確になされており、まさに歴史民俗資料学の論文として高く評価できる。また、口頭試問において著者に更なる質問も試みたがいずれも相応しい応答であった。その結果も合わせ、根敦阿斯尔氏に博士（歴史民俗資料学）の学位を授与することがふさわしいものと審査員一同これを認めるものである。